

## その他

### —超高齢社会の医療を担う看護師・看護学生の 「看護実践能力」に関する検討—

An Examination of the Practical Nursing Ability of Nurses and Nursing Students  
Responsible for Healthcare in a Super-Aged Society

江川隆子<sup>1)</sup>, 小平京子<sup>1)</sup>, 奥津文子<sup>1)</sup>, 赤澤千春<sup>2)</sup>, 西園貞子<sup>3)</sup>, 日隈ふみ子<sup>4)</sup>,  
青山美智代<sup>5)</sup>, 森本喜代美<sup>6)</sup>, 箕浦洋子<sup>7)</sup>, 奥田寛司<sup>8)</sup>, 林優子<sup>9)</sup>

- 1) 関西看護医療大学 看護学部 基礎・成人看護学
- 2) 大阪医科大学 看護学部 成人看護学
- 3) 梅花女子大学 看護保健学部 看護学科
- 4) 佛教大学 保健医療技術学部 社会学
- 5) 奈良県立医科大学 医学部 基礎看護学
- 6) 園田学園女子大学 健康科学 在宅看護学
- 7) 尼崎総合医療センター
- 8) 株式会社 リアセック
- 9) 前大阪医科大学

Takako Egawa<sup>1)</sup>, Kyoko Kodaira<sup>1)</sup>, Ayako Okutsu<sup>1)</sup>, Chiharu Akazawa<sup>2)</sup>  
Teiko Nishizono<sup>3)</sup>, Fumiko Hinokuma<sup>4)</sup>, Michiyo Aoyama<sup>5)</sup>, Kiyomi Morimoto<sup>6)</sup>  
Youko Minoura<sup>7)</sup>, Hiroshi Okuda<sup>8)</sup>, Yuko Hayashi<sup>9)</sup>

- 1) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Fundamentals and Adult Nursing Science
- 2) Osaka Medical College, Faculty of Nursing, Adult Nursing Science
- 3) Baika Women's University, Faculty of Nursing and Health Care, Nursing Department
- 4) Bukkyo University, School of Health Sciences, Sociology
- 5) Nara Medical University, Faculty of Medicine, Nursing Science Fundamentals
- 6) Sonoda Women's University, Health Sciences, Home Health Nursing Science
- 7) Amagasaki General Medical Center
- 8) RIASEC, Inc.
- 9) Previously of Osaka Medical College

この研究は、関西圏にある5つの看護大学で、平成28年度（2016）入学の看護学生から経年的に看護学実習により育成される「看護実践力」をPROGテスト（社会人実践力評価）を用いて評価し、看護実践力に影響する要因を明らかにするためのものである。今回は、その研究の資料とするために、A大学に平成28年度（2016）に入学した1年生の学生と平成28年度（2017）に卒業した4年生の「看護実践力」を検討したものである。その結果、平成28年度（2016）入学の1年生と平成28年度（2017）卒業生の比較では、4年生のリテラシーは高い傾向にあるが、コンピテンシーが若干低い傾向にあった。4年生のリテラシーが高くなる要因には看護の思考力である看護過程の演習・実習を通して、「情報収集力」、「分析力」、「課題の抽出力」が高められたと考えられた。一方、コンピテンシーは、看護学実習の育成の目標の1つである「対人基礎力」、「対自己力」、「対課題基礎力」が含まれていることから、4年生が1年生より低い値であることが実習の成果を考える上での課題となった。

**キーワード**：超高齢社会，看護師・看護学生，看護実践能力，PROG

**Keywords**：super-aged society, nurses and nursing students, practical nursing ability, PROG

## I. はじめに

戦後70余年、人生や健康（生・死を含め）に対する社会や国民の考え方が変化している。一般的な考えとして、戦後間もないころ、国民にとって「健康」は「天からの賜りもの」や「もうけ物」であり、自らヘルスプロモーションするという意識は少ない傾向であった。しかし戦後高度成長期を越え生活の安定や教育が向上する中で、幸せな生活を継続するために「健康」はなくてはならない基本であるという考え方が国民に浸透していったと考える。それと並行して、医療政策も病院での治療中心から、地域在宅医療へ、そして予防医療へと変化してきている。その結果、入院期間の短縮化・地域在宅医療への移行・慢性疾患に対する療養指導の強化などとともに、疾病構造や少子高齢社会の進展に伴う医療の変化や医療技術の超高度化が急激に進んでいる。そのような現状を受け文部科学省は、医療の変化を積極的に取り入れ各看護大学の特色を生かしたカリキュラム構築を推し進めるよう求めている（中央審議会の報告，2010）。にもかかわらず、「看護学実習」に関してのみ、国家試験受験資格に必要な科目として、時間数・内容・方法において厚生労働省からの厳しい制約があるため、どの大学の実習改革の内容は大同小異であり、ここ数十年大きな変化はなかった。

しかしこの看護学実習での学習によって、次世代社会の要望に応えるための看護実践能力が育成できるとの期待から、2015年変革が指示された（中央教育審議資料，2014）。その中には、実習目的にかなった実習時間か、実習形態は適切か、実習内容や実習指導者は適切かなどの多くの指摘があった。長く続いた従来の看護学実習で、看護専門職に必要な知識・技術・態度を総合的に活用できる看護実践能力、すなわちリテラシー能力・コンピテンシー能力が十分育成されているのか疑問視され始めたのである。さらには就職3年目までの看護師離職率が13%と、新人看護師が次々に看護の現場を離れていく状況を引き起こしている原因として、看護基礎教育において「看護実践能力」を十分育成できていないからではないかと考える。そのような現状の中で、平成27年5月から関西圏の5つの看護系大学が集まり「今後、社会で求められる看護人材」の育成に向けた研究会を立ち上げ、毎月検討を重ねている。本研究会は、看護師に求められる看護実践能力に着目し、看護学実習のあり方を検討するために文献検討を含めその基礎データの集積と分析を続けている。

今回の研究目的は看護系大学に入学した学生が、看護学の教育を、特に看護学実習を通して社会人能力がどのように変化するかその実態を見ることとした。

## II. 研究方法

1年生と4年生に社会人実践力評価（Progress Report on Generic Skills）テスト：以後PROGテストとする）を行った。このPROGテストで測定できるリテラシーとコンピテンシーを1年生と4年生で比較検討し、看護学学習を通して看護実践能力の変化について検討した。

具体的な研究プロセスは以下のとおりである。

1. 5大学それぞれの看護学部にて在籍する入学3ヶ月後の実習開始前（7月）の学生と卒業前全看護実習終了時（3月）の学生に対し、PROGを実施した。
  2. 収集したデータから、入学3ヶ月後の実習開始前（7月）と卒業前の比較を行い、看護学学習により育成される看護実践能力を評価した。
- 測定ツール：PROGテストを用いて看護実践能力を測定する尺度として使用する。PROGテストは、社会人基礎力（経済産業省）・学士力（中央教育審議会）・新学習要領を基に構築されたツールであり、妥当性も検討されている。さらにこのPROGテストは、本研究のメンバーである西菌貞子（基盤C, 平成25-27）の「IBL方式を用いた看護アセスメント能力向上教育プログラムの開発」により看護学生の看護実践能力（リテラシー力とコンピテンシー力）を測定できることも検討されている。PROGテストのコンピテンシーには、統率力、コミュニケーション力、問題解決能力などが含まれるもので、「看護実践能力」の根幹となる要素を示している。
- 分析：分析は、各項目の平均値の集計に加え、各項目の判定レベルの分布から標準誤差を集計した。

## III. 結果

今回は、平成28年度（2016）にA大学に入学した1年生と平成28年度（2017）に卒業する4年生の「看護実践能力」の横断的調査の結果について報告する。受験者数は平成28年度（2016）入学の1年生105名、平成28年度（2017）卒業の4年生42名である。また、図1と図3は平均値に加え、標準誤差の2倍の幅を縦線で示している。

図1はリテラシー能力の総合レベルを7段階で評価したものの1年生と4年生の平均値である。リテラシー能力の総合レベルは、4年生が4.69で

1年生の3.87に比較して有意に高かった。

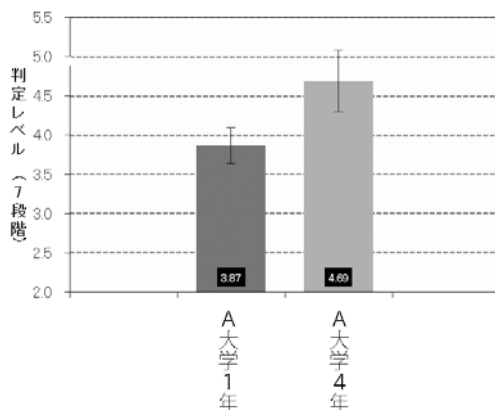


図1 1年生と4年生のリテラシー能力

図2はリテラシーを項目別に5段階で評価したものであるが、4年生は1年生と比較し、情報収集力（1年生：3.20/4年生：3.81）・情報分析力（1年生：2.52/4年生3.62）・言語処理能力（1年生：2.82/4年生：3.60）が有意に上回っていた。

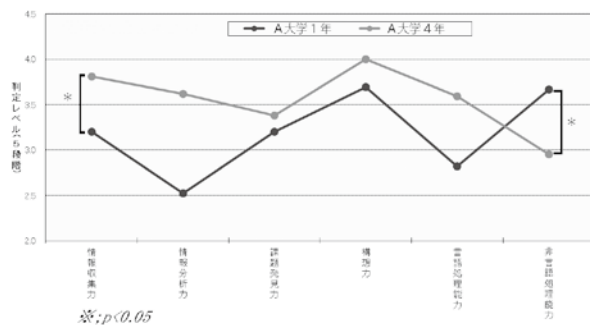


図2 1年生と4年生の項目別リテラシー能力

次にコンピテンシー能力である。図3はコンピテンシー能力の総合レベルを7段階で評価した1年生と4年生の平均値である。コンピテンシー能力の総合レベルは、1年生（4.69）が4年生（3.12）に比べて有意ではないが上回っていた。

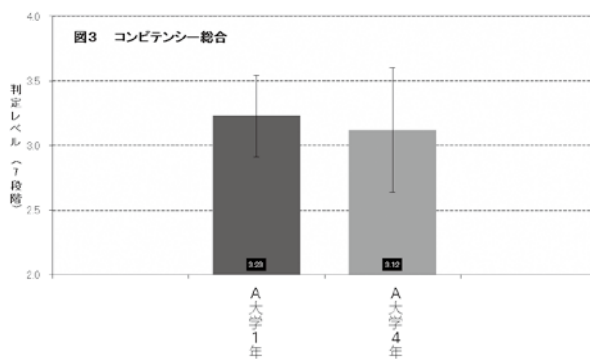


図3 1年生と4年生のコンピテンシー能力

図4はコンピテンシーを項目別に7段階で評価したものである。1年生・4年生ともに共通して、親和力・協働力・実践力が平均値を超えていた。一方で、統率力は1年生(3.08)と4年生(2.73)

であり平均値以下であった。コンピテンシーを項目別に見ると、4年生は1年生と比較し、自信創出力(1年生:3.30/4年生:3.61)と課題発見力(1年生:3.24/4年生:3.61)が上回っている。

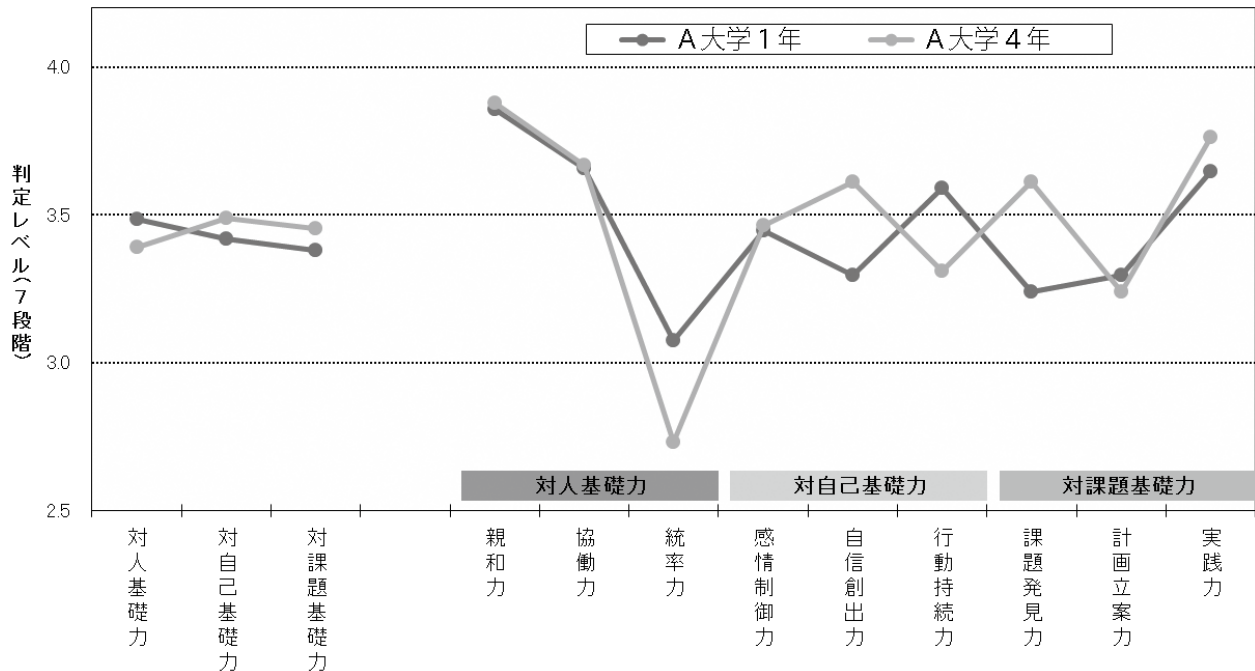


図4 1年生と4年生の項目別コンピテンシー能力

#### IV. 考察

平成28年度(2016)入学学生の1年時と平成28年度(2017)卒業時の4年生を比較したものである。今回の結果から、リテラシーは、入学時の学生3.87と比較して、4年生(4.69)が有意に上回っていたが、4年生の「コンピテンシー能力」は、1年生に比べて低かった(1年生:3.23/4年生:3.12)。コンピテンシーには、統率力、コミュニケーション能力、問題解決能力などが含まれ、実習で育てる実践力の1つとしているものである。一方、4年生でリテラシーが高くなる要因は、看護の思考力である看護過程の演習・実習を通して、これらのリテラシーの要素である「情報収集力」、「分析力」、「課題の抽出力」が向上したと考えられる。しかし、4年生が1年生よりも低い傾向であったコンピテンシーには、看護学実習の育成の目標の1つである、特に「対人基礎力」、「對自己力」、「対課題基礎力」が含まれていることから、実習カリキュラムの改革を検討している本研究会の一つの

課題となった。この傾向は、研究会に属している他大学でも同様の傾向がみられること口頭で報告された。

本研究は、住友電気工業株式会社からの助成によって行われた。

#### 文献

- 1) 経済産業省(2006):社会人基礎力に関する調査・報告書
- 2) 文部科学省(2009):中央教育審議会大学分科会資料・報告書(2010・2014)
- 3) 学校法人河合塾:ジェレリクトスキル測定の試行と測定の試行と分析の報告書,教育研究開発本部
- 4) Assessing an Assessment Tool of Higher Education; Progress Report on Generic Skills (PROG) In Japan, International Journal of Evaluation and Research in Education (IJERE), Vol.3, No.1, March 2014, pp. 1-10